

色川大吉

● 巻頭インタビュー

八ヶ岳山麓ひとり暮らし

登山、車でのユーラシア横断など、旺盛なフィールドワークで民衆思想を照らし出した色川大吉氏。反骨の歴史家は今、山梨県八ヶ岳山麓で何をし、何を思うのか。



いろかわ・だいきち
一九二五年千葉県佐原市（現香取市）生まれ。歴史家・思想家。旧制第三高等学校（仙台）から東京大学文学部へ。学徒出陣で海軍航空隊へ入隊、復員後、四八年同大学卒業。「ウ・ナロード（人民の中へ）」を旨とし栃木県の中学教員となるも後に上京。東京経済大学教授、米國プリンストン大学客員教授などを歴任。六〇年代に「民衆思想」という新分野を拓き、『明治精神史』『明治の文化』などを著す。七五年『ある昭和史』で「自分史」を提唱。水俣病問題や市民運動に関わる一方、長年にわたりシルクロードやチベットなどを踏査した。

新緑の庭にて。（写真＝中沢一議氏、
写真提供＝色川大吉）

少し元気を取り戻した頃、 「猫の手くらぶ」という 互助会を作りました。

●——肝臓ガンを宣告されて、療養とご自分の「最後の仕事」に集中されるためにこの八ヶ岳南麓の山荘に移住されて十年以上の年月がたつとお伺いします。その後、ご体調はいかがですか。

都会の病院に入院して治療をするより、空気の澄んだ人里離れた場所で保養しながら、自分のペースで暮らし、仕事ができればと思います、この森の家を建てました。

ひとりですので家事労働と冬の厳しさは大変ですが、病気から少し元氣を取り戻した頃、この土地で同じような暮らしをしている人たちに呼びかけて、「猫の手くらぶ」という互助会を作りました。集まって小さな会を楽しんだり、お互いに連絡を取り合ったり、何か手伝ったりしてくれた時には「ニャン

せずに寝ていられますし。

●——「コミュニティの活動は『猫の手くらぶ物語』（山梨日々新聞社刊）」という本にまとめられていますね。もしご病氣にならなければ、その後も東京で生活を続けられていましたか。

大学を定年になっても、押し付けの仕事はたくさん抱えすぎていましたから、自分の仕事に集中するためには、いつかは避難していただいでしょうね。あのままだったら、ガンは免れても、過労で心筋梗塞か脳溢血でぽっくり逝ったかもしれない。むしろ病氣になって長生きしたわけです（笑）。

最近では医療技術が進みましたから、病氣をしてもなかなか死ねない。それでお金がかかり、周りに迷惑もかける。高齢化社会というのも考えものです。『若者が主役だったころ——わが六〇年代』という本を書きましたが、若者が主役だった半世紀前と較べると、今の主役は老人たちで、テレビや新聞で目にするのは、介護や年金だの話題ばかりです。

券」という一ニャン五百円相当の地域通貨を発行したりして、助け合いながらやっています。

コミュニティ作りは東京でもしてきましたし、礼儀をわきまえて頭と少しの労力を使えば誰にでもできます。まず会則・会費・序列などを作らない。お互いに過去を問わない、家族の話や自慢話はしない、「奥さん」などと言わず、名前で呼びあうなど原則を作りました。でも十年経つと、移住する人も出てくるし、皆も老いるわけですから、あまり体力や時間を使う仕事はだんだん出来なくなってきましたね。わたしの病氣の方は、血液の中にはまだウイルスはいますが、八ヶ岳から噴き出すおいしい井戸水を飲み、自分の体にあつた食事をしていたら、それを抑える抗体が涵養され、今は病氣の数値もぐっと低くなりました。ひとり暮らしですから、誰に遠慮も

●——今日は色川さんをお訪ねして、今度われわれが出す『やま・かわ・うみ』という季刊誌にふさわしい、山登りや自然暮らしの話題を氣の向くままにお話していただければと思いました。

色川さんはちょうど戦争が始まった頃、仙台の旧制二高の山岳部に所属して、登山に熱中して青春を過ごされた。その後、学徒出陣で航空隊入り、敗戦後は栃木の山村で教員をしながら文化運動をしたり、民主商工会で働いたり、劇団に参加したり、紆余曲折の後に、歴史家になられました。学術研究に専念されてからは、「行動する歴史家」として国内のフィールドワークはもとより、海外の学術探検隊に参加し、シルクロード、インド、チベットなど精力的に旅や探査を繰り返してきました。それらの体験を『ユーラシア大陸思索行』『雲表の国』『フーテン老人世界遊び歩記』などの本に書かれています。そういうアウトドア的な活動についてお話を伺えればと思います。

わたしは学者なのか、運動家なのか、旅行家なのか、自分でもよく分からない人間ですから、そういう氣の多い人間は、今の世に便利に使われやすいですね。